

京都大原魚山勝林院本尊阿弥陀如来像調査並びに所蔵品整理作業中間報告

鈴木 久男

伊東 史朗

天納 聖佳

要 旨

勝林院は大原北東部の山麓に位置する天台宗の寺院である。周辺には、三千院や後鳥羽天皇陵を始め、勝林院を管理する実光院や宝泉院などがある。勝林院は、平安時代に寂源によって中興されたといわれる寺院とされ、また天台声明の根本道場としても著名である。そして、鎌倉時代に浄土宗の法然は、ここ勝林院において談義を行ったため、浄土宗の信者からも厚い信仰を集めている。

平成二十四年秋、京都産業大学むすびわざ館ギャラリーは、平成二十五年に中興して千年という大きな節目を迎える勝林院の

歴史や文化財の展示を計画した。そこで京都産業大学日本文化研究所は研究活動の一環として、勝林院本尊の阿弥陀如来像の調査を勝林院の協力を得て実施した。さらに平成二十五年には勝林院に所蔵されている文化財の整理作業を関係者のご理解により実施することができた。

本報告は平成二十四年度に実施した阿弥陀如来像の調査と平成二十五年に行った整理作業のなかで明らかになった成果の中間報告である。なお執筆の分担は文末に（ ）で表記した。

キーワード… 京都大原、寂源、法然、大原問答、証拠阿弥陀腹内

記

一 勝林院の概要

報告の前に、勝林院の環境と歴史について概要を述べる。

沿革

勝林院は、長和二年（一〇一三）寂源によって開基された天台宗の寺院であり、先述したように天台声明の道場としてよく知られている。本尊は阿弥陀如来で、大佛師康成（尚）の作とされている。この本尊は、「証拠の阿弥陀」ともいわれている。それは、寛仁四年（一〇一八）の法華八講に際し覚超と遍救が論争した「大原談義」のときに本尊が自ら意を示されたといわれている。さらに文治二年（一一八六）顕真の招きにより法然が勝林院において諸宗碩学と宗論を戦わせた「大原問答」のときにも、本尊が光明を放たれ証拠をしめされたという。そのため「証拠の阿弥陀」とも称されるようになった。そのため本堂は証拠堂とも呼ばれるようになった。

寛永十年（一六三三）、春日局は、崇源院の菩提を弔うために本堂を再建しその供養を行っている。

ところが再建から約一〇〇年後の元文元年（一七三六）本堂・本尊をはじめ西林堂・山王権現社・弁天社などが火災に遭い焼失した。しかしながら元文二年（一七三七）本尊は開眼供養されたが本堂の再建はならず、そのため本尊は仮堂に安置されたようである。そのため本堂の再建が急がれたが、再建の浄財が思うようにならなかったようである。明和四年（一七六七）に公儀に援助の願いを出している。本堂が一応完成したのは安永八年（一七七九）のことである。この時に供養され

た建物が現在の本堂である。それから四年後の天明三年（一七八三）になって屋根が正式に葺かれ本堂はついに完成した。

環境

勝林院（図1）は大原の里の北東部比叡山から比良山地へと続く急峻な尾根から少し下がった西山麓に位置する。標高は二六八メートルを測る。境内地は東から西へまた南から北へと低くなる傾斜地を開削し造成している。そのため勝林院境内を律川が流れる南側から眺望すると本堂を見下ろすことになる。

現在の境内は図4のように本堂・鐘楼・土蔵（宝蔵）などが建ち並ぶ空間とその東側に本堂より一段高くなった平坦地があり現在重要文化財の指定を受けている宝篋印塔がある。ここには元文元年（一七三六）に焼失した西林堂が建立されていた。二つの空間を計測すると本堂や鐘楼がある平坦地は東西約四十メートル・南北約五十五メートル西林院跡は東西約二十メートル・南北約二十メートルである。

江戸時代の勝林院は本堂・西林院・鐘楼・食堂の堂舎と、理覚坊・実光坊・宝泉坊・普賢院の四坊があった。「山城国愛宕郡魚山大原寺勝林院」によれば境内の規模は東西一町半南北二町半とある。この寸法を現尺に換算すると東西一六五メートル南北二七五メートルになる。江戸時代の勝林院の境内は現後鳥羽天皇陵・現実光院・現宝泉院を含む範囲であったことが分かる（図2）。

江戸時代の実光院は現後鳥羽天皇陵の場所に食堂は現在の実光院境

内の北側にあったようである。また現在の鐘楼は勝林院境内の南東に位置しているが『都名勝図絵』（安永九年「二七八〇」）には現在より西側に描かれている。明和の再建時に変えられたのであろうか。

二 調査の概要

平成二十四年度本尊阿弥陀如来像の調査

所在地…京都市左京区大原勝林院町一八七

調査期間…平成二十四年十二月十五日・十六日

調査担当者…鈴木久男、伊東史朗

調査者…越後智貴（文化学部）、村田 光（文化学部）、財木

香帆（文化学部）、奥見裕梨（文化学部）、菊池美帆

（文化学部）、川崎瑞季（文化学部）、川上由里絵（文

化学部）、松岡文也（文化学部）

業務委託…日本通運株式会社関西美術品支店、山崎兼慈写真事

務所

【調査日誌】

十二月十五日（土）晴

調査機材を駐車場から現地に運搬する。調査参加者の紹介と調査上の注意事項を確認する。最初に本尊西南側の毘沙門天像を移動する。並行して、正面の仏具類も少し移動し須弥壇周囲の作業空間を確保する。その後、本尊阿弥陀如来像の胎内調査を開始する。先ず本尊右側の膝部分を取外し、内部状況を観察する。内部には、西側から坐像一

軀・その東側奥に厨子二基が東西に安置されていた。東側の厨子は黒漆塗、西側の一基は白木造りであった。坐像・厨子共に本尊と同じ方向の南向きに納められていた。発見状況の写真撮影後胎内から一軀ずつ取り出し、調書を作成する。並行して計測と個別写真の撮影を実施する。

坐像は、阿弥陀如来であった。右手の一部が床面に落下していたため収納した。黒漆塗の厨子には小型の如来像が納められていた。仏像の底部と台座の上面には墨書があった。白木の厨子内にも如来像が安置されていた。如来像は台座に固定されていたため墨書の有無は確認できなかった。

続いて本尊阿弥陀如来像の内部調査を行う。体部及び頭部を詳細に観察したが銘文は発見されなかった。また頭部・体部の制作状況や頸部の接合状況を観察し細部の写真撮影を実施する。内部調査終了後、調査のために取り外した阿弥陀如来像を旧状に復した。

十二月十六日（日）晴

作業開始前に、宝泉院住職による法要が行われた。その後堂内と本尊の全景写真撮影の準備を行う。本尊御手に結ばれている五色と白い綱とを取り外す。その間に、本尊の計測作業を行う。計測終了後、写真撮影を実施する。撮影は十四時近くまで続く。その間に堂内に安置されている諸仏の調査をする。

本尊の写真撮影終了後、毘沙門天像を元の位置に戻す。その後、毘沙門天・不動明王像の調査を行う。御住職のご厚意で、その他の収蔵

品も調査した。十六時過ぎから、堂内に設置した機材の撤収を実施する。宝泉院住職立会後に、総ての作業を終了する。(文責 鈴木)

【阿弥陀如来像の調査】

形状(写真4)

本体…螺髪肉髻白毫をあらわし耳朶環状二道刻出(頭・体両部の接合線を皴とれば三道だが両部は後述のように別作なので二道であろう)。衲衣を偏袒右肩に着し両手を腹前で定印(妙觀察智印)に結び右足外に結跏趺坐する。

光背…二重円光周縁部つき。周縁部には全面に雲をあらわしそこに両手を衣内に入れて組む十三軀の小仏像(坐像)を配する。

台座…仰蓮反花二重框座。

法量(単位Ⅱセンチメートル)

像高	二八・四
髮際高	二三・二
頂―顎	九一・二
面長	五一・八
面幅	四九・〇
面奥	六五・〇
胸厚(左)	七十一・五
腹厚	七十九・〇
臂張	一七〇・五

膝張 二一三・五

膝高(左) 四十三・〇 同(右) 四二・七

坐奥 一五八・七

耳張は測りえなかった。

品質・構造

木造(ヒノキ)寄木造金泥塗り(肉身部)・漆箔(着衣部)玉眼嵌入。構造は相当複雑であるが像内の観察によりつぎのように考えられた。根幹部は頭・体別材その両部に分けて記述する。

頭部(写真8)…額の高さで角材を四角く組み四隅を欠いてそこに小材を入れ全体を隅欠き方形(変則八角形)とする。各長辺につき前方に面部を形成する一材両側に両側頭部を形成する各二材を当て(両側後方材の間に横棧を渡す)後方には短辺を伸ばして後頭部を形成する三材を台形に組む。この三材はその半ばで横に鋸を入れ頭部の傾斜に合わせて斜めに折り台形の上方に横二材を載せる。各短辺にはそれぞれ幅狭の材を当てる。隅欠き方形に組んだ材の上は頭頂部を形成する材(縦材と見られる)とその中央に開けられた円孔内に肉髻を形成する横二材を載せる。以上のように徹底した箱形構造である。両側後方材の下方に両耳孔となる小円形孔を貫通させる。

面部を形成する前面材の像内仕様は多少変わっている。玉眼当木を木屎漆で勾玉形に塗り込めその下方鼻に当たる箇所を三山形に大きく削り鼻孔を貫通させまた口的位置には大きい段差がある。あた

かも中世鬼神面の面裏を見たような仕様である。

体部・あまり規則的な木寄せでないがほぼ前・中・後の三部からなる。前部一材後部左右三材。間に挟まれる中部は首柄後方の周辺に小角材七個（縦材）を入れて後襟部をつくりそのうしろに数材を寄せて体背上方とする。頸部左方に縦三材を前後に寄せて左肩部を形成し同部右方に縦三材を不規則に寄せて右体側部を形成する。不規則ながらこのように前・中・後各部に分けて縦材を寄せるので基本的に三列構造である。前部材を地附から半円形に削って窓をあけ右体側材は地附まで達していない。

像内頸部のあたりを観察すると（写真7）その前面中ほどにある線は自然の割れと思われほかの接合線は体部につづかないので割首でなく首柄挿しである。体部材は整形された首柄周囲の丸みに合わせて寄せられており両部の造立時期に差のあることは明らかである。

右手は肩・臂で各接ぎ両手首先（共木）を左方は袖口に差し込み右方は手首で接ぐ。両脚部に横材を寄せる。

根幹部と両脚部を内割り像内素地。左体側部と両脚部の体部との各接合面に板を貼り（そのため内割り内は観察できない）板面は墨塗り。像表面は肉身部金泥着衣部漆箔。頭髮群青眉・ひげ墨描唇朱。肉髻珠・白毫水晶製。

像内納入仏

内割り部内の台座天板上につきの三像が納置されていた。

一・木造阿弥陀如来坐像（写真9）像高十八・七センチ

来迎印を結んで坐す阿弥陀如来像。光背・台座つき。光背裏面に「恵心僧都正作也」の朱漆書あり。

木造（ヒノキ）一木造墨塗り（後補）。両脚部を含んで頭体を縦一材から彫出し左手首先別材（亡失）右手は肩・上膊半ば・臂で各接ぎ上膊半ば先一臂を亡失するが臂先部が別に残る。白毫水晶製（後補）。現状の表面墨塗りは後補で当初は素地仕上げだったか。本体は平安時代後期十二世紀作光背・台座は江戸時代作。

二・厨子入り木造如来坐像一（写真10）像高六・四センチ

両手を腹前で衣内に入れて坐す如来像。光背・台座つき。本体は像背が扁平なのでもとは光背取りつけの化仏か。像底に「慈覚大師／大□光仏／御作」の墨書あり。本尊阿弥陀如来像光背に附属していた時期があったか。

木造（ヒノキ）一木造古色。総体を縦一材から彫出。本体は鎌倉時代十三世紀作光背・台座と厨子は江戸時代作。

三・厨子入り木造如来坐像二（写真11）像高六・七センチ

両手を腹前で衣内に入れて坐す如来像。光背・台座つき。本体は光背化仏か。

木造一木造漆箔。本体は江戸時代作光背・台座および厨子も同作。

解説

平安時代後期以降一般的になる丈六の大きさの定印阿弥陀如来坐像

であるが体部に比し頭部やや過大のプロポーションに気づかれる。長い面相部に細く切れ長の目の中ほどのふくらむ鼻梁を配し湾曲の強い耳朶をあらわすというクセのある頭部に対して体部は部分を強調するところがなく安定した像容である。頸部が三道でなく二道というのも頭部の一種特異さに通じている。

頭・体部のプロポーションおよびその作風がそれぞれこのように異なっているのは木寄せ構造の違いにも対応する(材質・構造の項参照)。すなわち頭部は隅欠き方形のまわりに縦板数材を八角筒形に組みその上に頭頂部を形成する別材を当てるという箱形構造なのに対し体部の基本的な構造は前・後二材の間に頸まわり体背上部左肩と右体側部を形成する中間部を入れて三列になる。頸部周辺もその丸みに合わせて体部材を寄せている。

作風上の径庭に加え構造にもこのような相違が認められるのは頭・体両部が統一的につくられたものでないことをものがたる。それぞれを手がけた仏師とその時期が異なると考えて間違いないだろう。

現存する本堂と本尊像は江戸時代享保二十一年(一七三六)元文元年(一七六〇)正月の本堂火災のあと復興されたものである。先の推定を踏まえていえば現存像の頭部は旧来の像のその部を転用しているといえるので本体では体部だけがこの時の造立となる。

そのことは江戸時代の浄土宗僧侶間通(二六九六―一七七〇)の行業を著した『関通和尚行業記』(享和二年「二八〇二」)のつぎの記事によっても証される。

師ある時大原勝林院の世に伝へて証拠の弥陀といへる丈六の本尊かつて火災に罹り面貌のみのこり給へるを得られき。のち明和五年この面貌を用ひて本のごとく丈六の座像を造立せられける。

すなわちかつての火災に焼け残った「面貌」(ここでは頭部)を享保二十一年火災後明和五年(一七六八)の造立時に再利用したというのである。

光背に附された小仏像(化仏)は大きさに違いはあれ整ったその着衣々文が本体のそれに似る。平成二十五年に公益財団法人美術院の修理した化仏二体のうち解体された一体につき修理解説書は「頭体別製(中略)体部は根幹部の前後二材の間に左右肩材をはさみ地付き部では肩材と同じ厚みの角材をはさむ」と頭・体別材体部は前・後材の間に両肩部材を挟むとしており本像と基本的に同じ構造である。よって化仏と同伴と見られる光背全体も享保火災後の復興時本体に並行してつくられたものと判断される。台座仰蓮・反花部も同時期のものだろう。

像内に納入されていた仏像三軀のうち(写真12)木造阿弥陀如来坐像は勝林院創建期より一世紀以上も下るものだが平安時代後期の美作なので当時の大原における盛んな造像の一端をしのばせる。木造如来坐像一・二はその形状や大きさからしてともに光背に附属した化仏と思われる。勝林院はその開祖を慈覚大師に擬していることから木造如来坐像一の墨書(写真11)「慈覚大師」云々はこの像が当院に係属することを意味するようであり「大□光仏」は一時期本尊像光背に附

属していた可能性を示唆する。しかしいずれも本来の納入でなく追納品である。

小結

阿弥陀如来像の調査によりその頭部・体部それぞれのプロポーシオンおよび作風が異なりまた木寄せ構造はまったく相違することが判明した。したがって両部の製作時期は異なる。

勝林院所蔵『証拠阿弥陀如来腹内記』の調査により勝林院とその本尊の創建から近世に至るまでの沿革がほぼ明らかになった。従来当院の歴史は主に近世地誌や旅行記の記事によるだけだったのだがこの史料の出現によりその沿革が知られるようになった意義はきわめて大きい。

そのうち本尊の造立以後の沿革が明らかになったことは大きな成果といえる。現存像が享保二十一年（一七三六）焼失翌元文二年に開眼供養されたと分かりそれだけでなく延徳四年（一四九二）に「面貌」（頭部）を「修補」したという記事が頭部・体部のつくりの違和感を裏づけるものと推定されたことも有意義であった。すなわち旧像の頭部を転用していることを意味する。頭・体部それぞれ室町時代と江戸時代における基準的な丈六像として評価される。

（文責 伊東）

三 平成二十五年所蔵品整理作業

所在地…京都市左京区大原勝林院町一八七

調査期間…平成二十五年六月一日・六月十日・七月二十日

調査担当者…鈴木久男、天納聖佳

調査者…堅田恵莉子（外国語学部）、関根由里恵（外国語学部）、野口智代（外国語学部）、伊坪哲史（文化学部）、

今里 玲（文化学部）、坂本明香里（文化学部）、千

福実（文化学部）、野田宏美（文化学部）、橋爪麻里

（文化学部）、藤川有咲（文化学部）、牧野 葵（文

化学部）、川崎瑞季（文化学部）、川上由里絵（文化

学部）

【作業内容】

作業は勝林院関係者のご厚意により所蔵されている多彩な資料の保存状態の点検収蔵庫内の清掃・整理を京都産業大学博物館学芸員課程の実習として実施することができた。

その際所蔵品の内容が新たになった資料が多数みられた。なかでも勝林院や本尊阿弥陀如来像に深く関わる重要な資料が再確認された。そのためその一部をここに紹介する。

『証拠阿弥陀如来腹内記』巻子 江戸時代（写真16・17）

勝林院には土蔵が二棟あるがそのうちの二棟で紙本や卷子などの資料点検と木箱や長持に防虫剤を入れる作業を行っている最中に『証拠阿弥陀如来腹内記』が長持から見つかった。発見当時の状態は長持の一番底に小さな木箱が長い木箱に隠れるように置かれており『証拠阿弥陀如来腹内記』はその小さな木箱の中に他二巻の巻子と共に入って

いた。箱書きは無く同じ大きさの巻子をまとめて入れたものと思われる。

法量（単位＝センチメートル）

縦 三十・四

横 二六〇・〇

行数 八十二

文字数 一一〇三

『証拠阿弥陀如来腹内記』は勝林院の本尊阿弥陀如来の像内に記されていた銘文や関連史料を江戸時代にまとめたものである。勝林院創建時から安永四年の本堂再建までの沿革が記されており本尊と本堂の修補や再建の歴史を知ることが出来る。

以下にその内容を紹介する。

（銘文）

願主太宰師中納言藤原隆家

中納言同経輔

造堂大工喜好大徳小工藤原安任

造堂造佛預長好大徳

□□故中関白像^{（奥書）}□文一付高階氏

大佛師 康成 或ハ尚作

其後年序既尚佛像朽損仍自永

承元年秋至同二年夏改造之修之西已

大佛師法橋上人位定朝

漆工大法師春久

法橋救明阿闍梨 僧都延殷

皇慶阿闍梨 覚尊阿闍梨 覚念大徳

仙隠阿闍梨 頼暹阿闍梨 斎殷阿闍梨

長源阿闍梨 教覚阿闍梨 快禪阿闍梨

永秀阿闍梨 聖能阿闍梨 永尊阿闍梨

散位平滋定 行照大徳 観尊斎延大徳

散位小野政国 源氏明源大徳 頼兼

大徳 道久大徳 頼遠大徳 蓮算大徳 台

尊大徳 仙久大徳 寿延大徳 行世大徳

札能大徳 延任大徳 行仁大徳 長能大徳

道仁、、延勢、、良満、、良心、、

尼紗田中善、、明泉、、忍志紀氏

藤原氏観寿丸 能陳大徳 葉寿丸

籠樹丸牛童丸 三郎丸 壬生乙延

小野近時 秀友 僧春久

僧長快法師 円範

観勝大徳 静範 連満大徳

正治二年十月十六日重而補修之

佛師 慶秀

又別記云

嘉禎二年梨本門主御修復

此時光中三千佛二菩薩御新造

又別記云

門主承圓僧正

松殿関白基房公息母前大政大臣忠雅公

女号西林院

建曆二年壬申正月十五日重上表辭退兩職三十三

移住大原健保二年六月十二日還補座主

御年三十五承久三年四月二十四日辭退座主職

委附入道尊快親王帰居大原

嘉禎二年十月十六日於大原入滅春秋五十七

塗師藤原吉祐明応三年四年御奉

塗之同元年二年又四郎孫次郎兩人

而奉塗之依致如在以外自煩間

堅斟酌仍改吉祐奉塗之

絵所性俊大徳 巳卯三月二十三日ヨリ

西阿第一之施主也

延徳二年盛夏天因庄内騒動本尊權軍

火僅奉取出本尊此時破損御面貌故募

衆縁而修補云々 別記云 延徳四年募衆縁勸進修補相好云々

別記云 台座長一丈同横八尺高三尺三寸八分

後光高一丈五尺同横一丈一尺五寸

大永四年為本堂再建募衆縁勸進本堂

再興 年月不詳

干時天文十三年甲辰七月四日巳亥大洪水來而

兩院本堂破損然間御本尊破損間冬

閏十一月三日ヨリ先加木修畢

願主兩人越前住人則南郡宇坂宗弥羨心者

江州志賀郡山門安樂院宗琳□心者

干時 定乘坊宏春法師 善賢院重測法師 寶泉坊幸測法師

向之坊祐運法師 実光坊秀存律師 普賢院弟子宏測律師

理覺坊重海律師 向之坊弟子貞運大法師 寶泉坊弟子重宗大法師

定乘坊弟子宗猷大法師 実光坊弟子秀・大法師

奉行宏測午刀者善心法師

元和年中為再建募衆縁勸進云云

浅井備前守長政第三女 台徳院殿

寛永年中為崇源院殿 御台所 御菩提

大猷院殿御乳母也 麟祥院云云

従関東御再建春日局施主云云

寛永二十年九月十四日寂

同年九月三日手斧始有之

同十年癸酉九月十五日堂供養庭儀曼荼

羅供舞楽

御導師梶井御門主最胤親王

享保二十一年正月四日焼失

元文二年丁巳秋本尊彫巧瑩治成

同年九月十六日開眼供養

宝暦四年為本堂再建募衆縁勸進

安永八年三月十五日堂供養庭儀曼荼

羅供

次に主要な部分を要約する。

まず創建時の本尊は大仏師康尚（定朝の師）の作であった。その後朽損により永承元年（一〇四六）に定朝が改造、追って正治二年（一一一〇）に仏師慶秀が修補した。次に嘉禎二年（一二三六）梨本門主御修復の際に光中の三千佛と二菩薩を御新造とあるが、本尊の木造如来坐像一がこの時の光背の化仏である可能性がある。

延徳二年（一四九〇）庄内の騒動により本尊に火がかかり本尊を取り出した時に御顔が破損した。そのため延徳四年衆縁勸進を募り御顔を修補とある。現在の本尊の頭部はこの時に修補されたものと思われる。

大永四年（一五二四）本堂再建のため衆縁勸進を募り本堂を再興したが天文十三年（一五四四）七月の大洪水により両院本堂と本尊が破損したため閏十一月に修理された。元和年中（一一一五―一二二四）に再度再建のため衆縁勸進を募り寛永年中（一一六二―一一六四）には崇源院殿御菩提のため春日局が再建した。

しかしながら享保二十一年正月四日本堂・本尊を焼失した。そのため翌年元文二年に本尊が造られ開眼供養が行われた。現在の本尊の体部と台座および光背はこの時に造られたものである。その後数年にわたり本堂再建のため衆縁勸進が行われ安永八年（一七七九）三月十五日現在の本堂が再建され今に至っている。このように勝林院は幾度も災害に遭いながらもその度に信仰を受ける人々によって再建されてきたことがわかる。

ところで勝林院に関する史料は『魚山叢書』（勝林院所蔵）や地誌、棟札など僅かであったが今回『証拠阿弥陀如来腹内記』の存在を確認したことにより創建時から江戸時代までの詳細な沿革を知ることができるようになった。さらに勝林院にとって大変重要な史料が開基一千年の節目の年に明らかになったことは喜びにたえない。

（文責 天納）

むすびにかえて

平成二十四年度に行った本尊阿弥陀如来像の調査によって、あまりよく解っていなかった成立年代や変遷がある程度まで明らかにすることができた。合わせて、その存在がほとんど知られていなかった本尊内に納入された諸仏の詳細を明らかにしたことは、大きな成果であった。

さらに、平成二十五年勝林院関係者のご厚情により実施した学芸員課程の博物館実習では、『証拠阿弥陀如来腹内記』を再確認することができた。この史料によって勝林院の歴史や本尊の変遷をさらに一層深めることができたことは望外の喜びである。

最後になりましたがこうした一連の調査成果を公開することに快諾して頂いた勝林院（宝泉院）住職藤井宏全師にたいしまして衷心から感謝を申し上げます。

（文責 鈴木）

参考文献

- 永井規男『勝林院本堂・鐘楼調査報告書』京都市文化市民局文化財保護課
一九八八年
- 『京都市の地名』平凡社 一九七九年
- 山本博子「法然上人霊跡第二十一番大原勝林院について」『史学論集―佛教
大学文学部史学科創設三十周年記念―』佛教大学文学部史学科創設三
十周年記念論集刊行会編 一九九九年

An interim report about research on the Buddha Amitabha statue and the collection of Kyoto Ohara gyozan Shorinin

Hisao SUZUKI

Shiro ITO

Kiyoka AMANO

Abstract

The Shorinin is a temple of the Tendai sect of Buddhism located at the foot of a mountain in the northeast of Ohara.

The Shorinin is said to have been restored by Jakugen in the Heian period. In addition it is well-known as the Konpon dojo of Tendai statement. Honen of the Jodo sect discussed at the Shorinin in the Kamakura period. As a result, the Shorinin attracted a warm, hearted faith also from the believers of the Jodo sect.

Shorinin will celebrate in 2013 a major milestone, a millenium that passed from the restoration of the Shorinin.

Kyoto Sangyo University Japanese Culture Institute, made a survey of Amitabha Tathagata of Shorinin as part of the research activities on 15 and 16 December 2012.

In addition, in 2013, we have conducted research to organize cultural assets that Shorinin possess. This paper is an investigation report.

In a survey of Amitabha Tathagata statue in 2012, the statue of Buddha of late Heian period and the statue of Buddha of Kamakura period and the statue of Buddha of Edo period were found inside the Amitabha Tathagata statue.

We found that the head of the Amitabha Tathagata statue was produced in the Muromachi period and part of the body was made during the Edo period.

By organizing work of 2013, we found a historical Showkoamidanyoraihukunaiki.

This historical material is the inscription that was written inside of the Amitabha Tathagata statue of the original.

By these historical materials, the background of foundation original and subsequent changes of Shorinin became clear.

Keywords: Kyoto Ohara, Jakugen, Honen, Oharamondo, showkoamidanyoraihukunaiki



図1 勝林院位置図



図2 勝林院周辺部

『勝林院本堂・鐘楼調査報告書』から転載

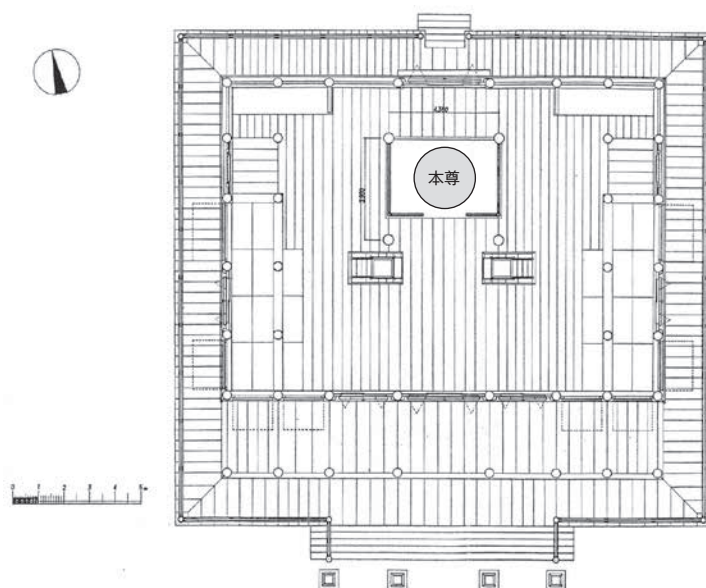


図4 勝林院本堂平面図

[永井規男氏作図 (一部改変)]

『勝林院本堂・鐘楼調査報告書』から転載



図5 『都名勝図絵』にみる勝林院

(国際日本文化研究センター所蔵)



写真1 勝林院本堂全景（南から）
撮影：鈴木



写真2 勝林院本堂全景（東南から）
撮影：鈴木



写真3 本堂内部の状況

撮影：鈴木



写真4 本尊阿弥陀如来坐像
撮影：山崎



写真5 右側腰部の取外し状況
撮影：山崎



写真6 胎内の安置状況
撮影：山崎



写真7 阿弥陀如来像内部—①（頭部と体部の接合状況）

撮影：山崎



写真8 阿弥陀如来像内部—②（頭部内側の状況）

撮影：山崎



写真9 木造阿弥陀如来坐像



(背面)



(右側面)



(左側面)



写真10 木造如来坐像 一



(背面)



(底面の墨書)

撮影：山崎



写真11 木造如来坐像 二



(拡大)



木造阿弥陀如来坐像



木造如来坐像 一



木造如来坐像 二

写真12 像内納入仏の比較
撮影：山崎



写真13 調査状況—①

撮影：鈴木



写真14 調査状況—②

撮影：鈴木



写真17 収蔵品整理作業参加者
撮影：鈴木



写真18 整理作業状況
撮影：鈴木